

平成21年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 カタクチイワシ

学名 *Engraulis japonicus*

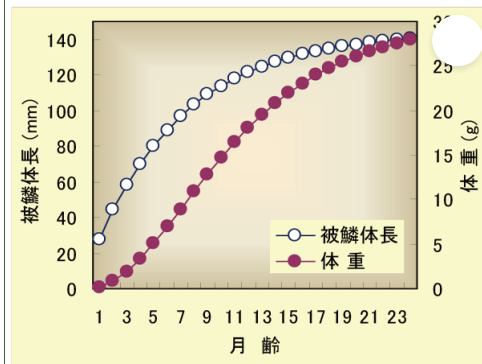
系群名 対馬暖流系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 2～3歳
成熟開始年齢: 1歳
産卵期・産卵場: 春～夏季、能登以南では秋季にも産卵、沿岸～沖合の広範囲
索餌期・索餌場: 分布域のほぼ全域
食性: カイアシ類を中心とした動物プランクトン
捕食者: 大型の魚介類、海産ほ乳類、海鳥類など

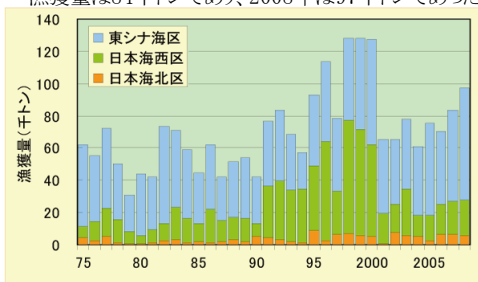


漁業の特徴

本資源は、日本海北区(石川県～新潟県)では主に定置網と敷網により漁獲され、日本海西区(山口県～福井県)では主に大中型まき網、中型まき網、定置網、敷網により漁獲されている。東シナ海区(福岡県～鹿児島県)では、主に中型まき網により漁獲される。なお、日本海および東シナ海では一部の海域を除いて、太平洋や瀬戸内海のようなシラスを対象とした漁業は発達していないが、鹿児島県や熊本県でシラスが漁獲される。

漁獲の動向

対馬暖流域では東シナ海区での漁獲量が最も多く、次いで日本海西区である。日本海北区ではさほど漁獲されない。近年では1998～2000年の漁獲量は100千トンを超えたが、2001年に急減し、以降は漸増傾向にある。2007年の漁獲量は84千トンであり、2008年は97千トンであった(シラスは除く)。

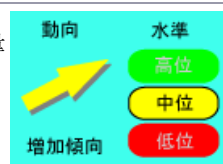


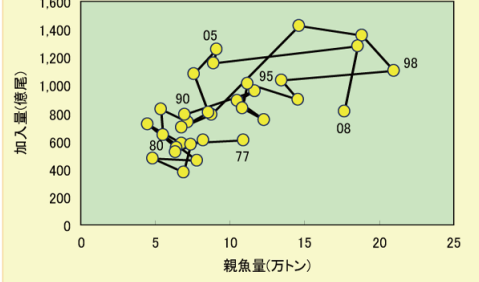
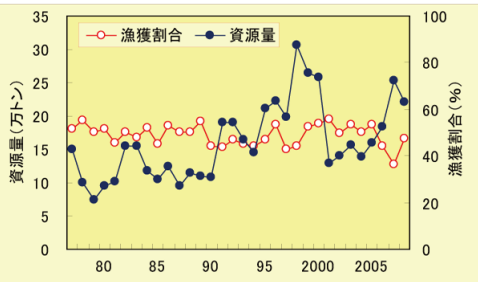
資源評価法

年別・年齢別コホート解析により資源量を推定した。自然死亡係数は1.0を用いた。他に、産卵量、計量魚群探知機による現存量推定など考慮した。

資源状態

産卵量の経年変化では、1990年末に増加し、2001年急減したものの、2002年以降は再び増加し2007年は高水準であったが、2008年は減少した。計量魚群探知機による現存量推定値は、変動を伴いながら2002年・2003年・2006年および2008年は少なかった。年齢別コホート解析の結果、資源量は1990年代後半は高水準にあったが、2001年に急減し、その後2007年まで増加してきたが、2008年にやや減少した。





管理方策

再生産関係から、再生産成功率(RPS)と加入量の上位10%を削除した交点をBlimitとした(親魚量91千トン)。現状はBlimit以上の親魚量(177千トン)と推定された。2009年以降の加入量を過去10年間の中央値のRPSとしたときに、Fcurrentでも資源は緩やかに増加するため、Fcurrentを採用した。予防的措置は0.8Fcurrentとした。

	2010年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	71千トン	Fcurrent	1.51	47%
ABCtarget	64千トン	0.8Fcurrent	1.21	43%

- Fcurrentは2008年のFで、Fは各年齢の単純平均
- ただしシラスの漁獲量を含む

資源評価のまとめ

- 年齢別コホート解析を行ったところ、資源量は2001年以降2007年まで緩やかに増加していたが、2008年にやや減少した
- 過去30年以上に渡る資源量の推定結果から、資源水準は中位と判断した

管理方策のまとめ

- 再生産成功率が過去10年の中央値であれば、Fcurrentで資源は増加する

平成21年10月23日更新

資源評価は毎年更新されます。